フエニキア語(又はカナン語)のAlphabetの起源及びモーゼのInscriptionとに就て

文學士　中原與茂九郎

本文に於て一九二五年十一月五日發行の週刊ロンドンタイムス誌三八七頁なる投書欄に寄書されたるガーディナー博士「シナイ碑文」Dr. Alan H. Gardiner, The Sinai Inscriptions の解讀に關する敷衍的紹介及びそれに對する私見とを述べて見たい。該寄書は八・五ポイント・ブルジョアー及び七ポイント・ミニオン活字八十行六百三十餘字の小品である。しかしこの小皿に盛られたるものは、Alphabet の起源に關する又或はイスラエルの子等をフアラオの國ミツライムより導き出したる豫言者モーゼにも係はるところの珍肴なれば、我史學界の膳上に運ぶも徒爾なる業ではなからうと思ふ。

Gardiner 博士の寄書の目的は Munich 大學のセム語學教授 Grimme 博士の最近試みし「シナイ碑文」解讀に關しての批判及び博士自身の主張の略述とにあるらしい。Gardiner 博士の所論、Grimme 博士の主張に觸るゝに先立ちシナイ碑文に就て一言せねばならぬ。

エジプトとアラビア半島とを北に結ぶ三角半島シナイ Sinai の Serabit el-Khadim の鑛山に於て Sir Flinders Petrie 博士は十一個の不可解文字にて彫されたる碑文を發見した。而して該碑文銘の出版は Petrie 博士より Gardiner 博士に委託された。

碑文の現物は今日カイロ博物館に保藏されてある。碑文銘及びそれに關するGardiner博士の論文は一九一六年のエジプト考古學雜誌第三號に記載されてある。私は該雜誌を手にすることが出來ない故其内容を知り得ないのは遺憾である。されば週刊タイムス誌上の寄書によりて以下博士の所論に觸れて見やう。

博士がPetrie博士よりシナイ碑文の出版を託され、該碑文に接して最初に注意を引きしは或一個の碑文の碑銘中に小文字initial characterと思はるゝものに、牛頭形のsignのありしことであつた。この事はヘブライ語の二十二個のAlphabetの第一文字なるalefが雄牛を意味することを思ひ起さした。而してこのことによりてサゼストされる假説は次の如くである。「シナイ碑文はフエニキアのAlphabetの非常に古き時代の形態を示してをるものであるかも知れない。卽ちそのAlphabetのうちには全部ではないが、文字がそのよばるゝ名（例へばalef）を示す物（雄牛）の形をもつて描かれてをつた時代のものであるかも知れない。」

而して該碑文の年代は博士の推定によれば、少くとも西紀前千四百年以下には下らず、恐らくは、それより五世紀以上も古いかも知れない。博士はかくして一層進みて碑銘を調査せしに六個のsignsが見つかつた。それは前に述べた雄牛の外に、家、水、目、頭、十字形のsignsである。この六個のsignsはヘブライ語のAlphabet中の六文字の意味と全く一致した。左にシナイ碑文の六個のサインとそれに應ずるフエニキア文字及びヘブライ文字とを列記比較せう。フエニキア文字はMark Lidzbarski, Handbuch der nordsemitischen Epigraphik nebst ausgewählten Inschriften. II. Teil. Weimar 1898. 中のTafel I, Tafel XLIV. 及びG. A. Cooke, A Text-Book of North-Semitic Inscriptions. Oxford

Sinai 1900-1400 B.C.	Phoenician Mesha 9.cent.B.C.	Siloah 8.cent.B.C.	Hebrew	Hebrew name	Hebrew meaning	Equivalent
𐤀	𐤀	𐤀 𐤀	א	'âleph	ox	ʾ
𐤁	𐤁	𐤁 𐤁	ב	bêth	house	b
𐤌	𐤌	𐤌	מ	mêm	water	m
𐤏	𐤏	𐤏	ע	'ayin	eye	ʿ
𐤓	𐤓	𐤓	ר	rêsh	head	r
𐤕 𐤕	𐤕	𐤕	ת	taw	cross	t

1903. の Plate XIIとにより、シナイ碑文は週刊タイムス誌上の寫眞によつてをる。

フエニキア文字（カナン文字ともいふ）の金石文は主としてフエニキア本土又はその植民地たりしアフリカのカルタゴ及び其他パレスチナの諸地方より發見された。其内最も有名なものは、一八六八年 Dibân で發見されたる一般には Moabite Stone として知られてをる、イスラエル國王 Ahab (875—854B.C.) に朝貢してをつたモアブ國王 Mesha の石碑 The Stele of Mesha, the King of Moab と一八八〇年 Siloah (Shiloh, Siloam) の池の附近にて發見されしユダ國王 Hezekia (720—692 B.C.) 時代のものなる所謂シロア碑文と稱せらるゝもの及び近年サマリアにて發見されたる Ostraca（土器等の破片に文字の彫られたるもの）等である。フエニキア文字のバレスチナ地方で用ひられしデートは Solomon (ca 970—932) 王以前に溯ることは出來ない。(1)

諸國語の Alphabet の起源と考へられしフエニキア語

のそれは、フェニキア人の發明せしものではない。從來フェニキアのAlphabet起源につきては數說あつた。今Sayce博士に從ひて[2]諸說とその代表者とを擧げやう。

（一）エヂプトの象形文字hieroglyphs說、此說はエヂプト學の始祖Chambollionがサゼストし、英國のSir W. Drummond (1825) 及びイタリヤのSalvoliniによりて採用された。他の多くの學者によりて此說が採用せらるゝにいたりしはエヂプト學者Emmanuel de Rougeが一八五九年Académie des Inscriptionsに於てその研究を發表せし以來のことである。彼の說はLenormant及びCanon Isaac Taylorによつて確めらるゝにいたつた。しかし此說は有力な說ではあるが普遍的には受け入れられてゐない。

（二）バビロニアの楔形文字cuneiform script說、此說はバビロニヤ楔形文字の古形より出たとして獨逸ミュンヘンのHommel教授によりて主張されてをる。W. Oncken, Allgemeine G. I, 2. Geschichte Babyloniens und Assyriens, Berlin 1885, ss. 54. 55を參照せられたし。

（三）Ed. Meyerはフェニキア語のAlphabetはヒッタイト語Hittiteのそれと同母系のものであらうとサゼストしてをる。

（四）南方アラビア(Minaean)說。この說はGlaser博士によりて主張された。

今日に於てもセム語Semiticの[3]Alphabetの起源及びそのデートに關して定說はない。S. A. Cook博士はセム語のAlphabetはセム語と同樣にセム民族自身の發明であり他の影響なしと說いてをる。[4]

さてGardiner博士はシナイ碑文中より六個の文字を推定したるを手がかりとして、次に或碑文中に四個のsignsの一團となれるものゝ解讀に從つた。而してそれをBa'alatと解讀した。一團とな

れる四個の signs の一つはフェニキア文字のLに驚くべき程似てをる。ヘブライ語の Alphabet 第十二番目の lāmed (L) はその意味曖昧である。

Ba'alat 𐤁𐤏𐤋𐤕 は舊約聖書に出てくる Ba'al の女性名詞にして Ba'al が男神なるに對して女神としてカナン民族（フェニキア人、ペリシテ人、モアブ人等）の間に崇拜せられた。Ba'alat はエヂプトの女神 Hathor と同一視されしはよく知られてをるところである。フェニキアノ都市 Gebal の Ba'alat は兩角の間に sun-disk をもてる Hathor と同樣に描かれてをる。(5)

Ba'alat の解讀が覆へさるゝか或は一層確めらるゝかは之を將來に俟たねばならぬが、しかし、恐らく、碑文の發見されし地方に於て前記のエヂプトの女神 Hathor が崇拜され、そこには該女神の神殿のありし、及び Hathor フェニキア人によりて Ba'alat と呼ばれたる考古學的事實はシナイ碑文の文字とフェニキア文字との類似てふ言語學的證據と結びついて Ba'alat と解讀せしこの讀み方の正しきことを支持するであらう。而して此の解讀が正しいとすれば、フェニキア語の Alphabet 起源に關する問題は、その起源はシナイ碑文の文字にまで溯りうるとの最後の決論に導かれる。Gardiner 博士の所說の要旨は以上の如きである。

シナイ碑文に關する上述の如き論旨の論文が一九一六年のエヂプト考古學雜誌第三號に發表せらるゝや多くの學者は該問題に關して執筆した。博士の說を肯定するもの、背定するもの、或制限のもとに肯定するものなど盛んなる論議を捲き起すに至つた。而して最近に於けるシナイ碑文に關する研究は Munich 大學教授 Grimme 博士のそれである。博士の解讀せしものは次の如し。

「石工の統領、神殿の長なる余、Manasseh は Pharaoh の女、Hatshepsut に感謝す。そは彼女

は余をナイル河より引き上げ高き名譽を余に與へたればなり。」

Grimme 博士は Manasseh を Moses としてをる。それは舊約書に一所モーゼのことを Manasseh と記してあるから。又 Hatshepsut をエヂプト第十八王朝の Thutmose I の女にして Thutmose III (1501—1447B. C.) と共にエヂプト女王として一五〇一—一四七九まで君臨せし、ブレステッドの所謂「史上最初の偉大なる女性」[6] Hatshepsut と同一視してをる。而して博士はイスラエル民族の出埃及のデートを一四四〇にとつてをる。以上の理由により博士はこの碑文はモーゼ自身彫銘せしものなりと決論してをる。

出埃及記に載せられたるイスラエルの傳承によれば蘆舟の中に捨てられしヘブル女の愛らしき幼兒は國王の女によりてナイルの河中より拾ひ上げられ、水の中より引き上げられしにより Moseh (drawn up) とは名づけられ、宮殿にて愛育せられ、エヂプトの高等教育をうけ、後、イスラエル民族を率ひて出埃及をなしてをる。出埃及のデートには大體次の四説あり。[7]

（一）第十八王朝前の Hyksos 時代、（二）第十八王朝の Thutmose 三世及び Amenhotep 三世及び四世 (Ikhnaton) 所謂 Amarna 時代、（三）第十九王朝の Ramses 二世及び Merneptah の時代、（四）第二十王朝時代、の四説である。Grimme 博士は第二説を採用してをるのである。

Grimme 博士の論文の發表は何誌になされたか今自分は知ることは出來ないが、最近に發表されしものなることは Gardiner 博士の寄書によつて推知することが出來る。博士の解讀に對しての Gardiner 博士の批評は次の如くである。

「Grimme 博士の解讀せし碑文は甚しく棄損されたるものである。博士の研究は實物に就きてで

はなく、寫眞版によりてゞある。而して博士は寫眞のうちに重要なものを見出してゐる。しかしそれは實物にはなきものなるを餘は何等の躊躇なしに云ふことが出來る。博士の大努力にてなりしは明なるその研究に對してけちを着けるは好ましからざることなれども博士の研究の結果は想像及び不可能の所產であると余は躊躇せずに、それに、資格ずけることが出來る。シナイに於て同種の碑文に對してより以上の研究がなされることが切望せらるゝ次第である。」

私は Grimme 博士の研究につきて、その研究の結果なる Gardiner 博士によりて示されたる解讀文の外、何の知識もない故に博士の研究につきて何等の批評がましいことはいへない。たゞ Grimme 博士の解讀が正しきか否かの決定のためには Gardiner 博士の所說の如く「Gardiner 博士の研究の基礎は寫眞にある故に、より以上の研究のためには、シナイ行のエキスペディションが組織されることが必要である」といふにとゞめねばならぬ。

私がこの寄書を讀みて興味を感じたのは Grimme 博士の說である。もし博士の說が正しいとすればこゝに面白き問題が出てくるのである。それは、出埃及記卅二章十六節にある「神の書」hammikhtāb ʾelōhîm の解釋である。十六節には「その板 halluchōth, (the tables) は神の造りたまひしもの、その書 hammikhtāb, (the writing) は板の上に彫られたる「神の書」hammikhtāb ʾelohîm であつた。」とあり、出埃及記三二章より三十四章にはシナイ山頂でモーゼが神ヤーウェ(エホバ)より十誡を授けられ、それを二枚の板に彫りつけるまでの物語が詳細に記されてある。三四章二八節には「……彼(モーゼ)は板の上に契約の詞 dibrē habbrîth 卽ち十誡 ʿaseret haddbārîm を彫りつけた。」とあり。

是によつてモーゼは「神の書」hammikhtāb ʾĕlōhîm, the writing of Elohim (God) を知つてをつたことが判る。「神の書」の書 mikhtāb (writing) は書物 sephēr, (book) ではなく「神の文字」とでも釋すべきものである。さて「神の書」の解釋につきては、誰しも思ひつくのはエヂプトの象形文字 hierogryphs のことである。エヂプトに於ては象形文字は神の文字であつて神の手によりて書かれるものと考へられた。ロゼツタ・ストン Rosetta Stone も象形文字は「神の書」であることを敎へてゐる。(8) しからばモーゼの知つてをつた「神の書」はエヂプトの象形文字であつたであらうか。この考へは尤もらしいものである。しかしそうではあるまい。なんとなれば、象形文字は物の形狀をもつて表はす文字である。十誡のうちには、「上は天にあるもの、下は地にあるものならびに地の下、水の中にある者の何の形狀をも作るべからず」(出埃及二〇ノ四) と禁じてある。「神の書」が象形文字でないとすれば次に考へらるゝのは楔形文字 cuneiform script, Keilinschrift. である。紀元前十五、四世紀以降九世紀頃まではバビロニヤ語及び楔形文字は西方亞細亞一帶及びエジプトに於ても一時は通用語 lingua franca であつたことはアマルナ文書 tablets of Tel-el-Amarna その他の粘土板文書 Clay tablets によりて明である。モーゼの時代がこのアマルナ時代であるとせば「神の書」はバビロニヤの楔形文字であると解釋するのは穩當なものであらねばならぬ。有名なセム語學者 Phillipe Berger はモーゼの十誡は楔形文字で書かれたものなるを主張した。(9) Ed. Naville もこの說をとつてをる。

もし Grimme 博士の解讀及びその說が正しいとすればこのシナイ碑文の年代につきては Gardiner 博士も Grimme 博士も殆んど一致してをる故に、モーゼが十誡を彫した「神の書」はこのシナイ碑

文の文字であらうと解釋することが出來るであらう。しかし此說はGrimme博士の說が正しいとの前提のもとに可能な說となるのであつて今日のところ未だ問題たるにすぎない。シナイ碑文の解讀等の研究は尙ほ之を將來に俟たねばならない。

(1) Edouard Naville, Archaeology of the Old Testament. London 1913. p. 13.
(2) A. H. Sayce, The Higher Criticism and the verdict of the Monuments. London 1892. pp. 37—46.
(3) The Cambridge Ancient History. vol. I. Cambridge 1923. p. 189.
(4) ibid, p. 189.
(5) Journal of Biblical Literature vol. XXXV. 1916. W. C. Wood, The Religion of Canaan, from the earliest times to the Hebrew conquest. p. 278.
(6) The Cambridge Ancient History. vol. II. 1924. p. 61.
(7) ibid. p. 356.
(8) Ed. Naville, Archaeology of the O. T. pp. 17—18.
(9) ibid. p. 71.

三角緣神獸鏡年代考定上の一二の新資料に就て

梅原末治

一

三代古銅器の後を承けて漢代に至り特殊の發達を遂げた支那の金屬古鏡に對しては近年本邦學者の熱心な研究に依つて、其の基準をなす年代觀が大體に於いて確立するに至つた。然し乍ら中で本邦上代の古墳から多數に發見する大形の所謂三角